

の間だけそれに従っているのがよい。進歩の状態に依つて、この型を変える事に躊躇する必要はない。

スケジュールの奴隷になつてはいけなければならないけれど、スケジュールに従つて練習するのは必要である。それには時を計るものが要るのである。それは置時計でよい。私の考えでは、安い置時計を買つてそれを「練習時計」と名づけ、その目的だけに使つて、たとえ愛する一人がそれを他の目的に使おうとしても断乎として戦うという事にするのがよいと思う。

他の二種目の時間の割合は色々に変えるにしても、初見練習の十分間と言うのは変えない方がよいと思う。初見練習は一日十分間以下では駄目だけれど、それ以上やる必要もない。上達するに従つて、歌い手や独奏者の伴奏をしたくなる。だろろうし、室内楽もやつてみたくなるだろろう。(附録二参照) そうすれば初見を稽古する機会は幾らでも出来る。そういう場合には、その最初の十分間を毎日の初見練習の時間と見做して、その先は楽しみの時間としてよい。

一時間をこういふ風に分ける事が、余りにも練習時間をコマ切れにして終うように見えても、これを日で考えずに、年で考えているのだと思つて頂きたい。一日三十分の楽曲練習は一年に一万九百五十分、即ち百八十二時間になり、五年間には九百十時間になり、十年間には千八百二十時間になる事を考えて貰いたい。テクニクを一日二十分間、練習すれば、一年には百二十一時間、五年には六百五時間、十年には千二百十時間になる。初見練習に費す一日十分は一年で六千時間、五年で三百時間、十年で六百時間になる。テレサ・カレーニョの父親は彼女が子供の時、一日十分間づつ——それより多くも少くもなく——初見練習をさせた。五十年後にこの大ピアノストは言つた。「そのお蔭で私が十四の時にはどんな曲でも初見で弾けるようになりました。」だけれど、それはカレーニョだからさ」と言う人もあろろう。しかし私は言う「それが初見の下手な大ピアノスト達の秘密にしている欠陥なのだ。私は世界的に有名な名ピアノストの一人でありながら全然初見の出来ない人を知つている。」

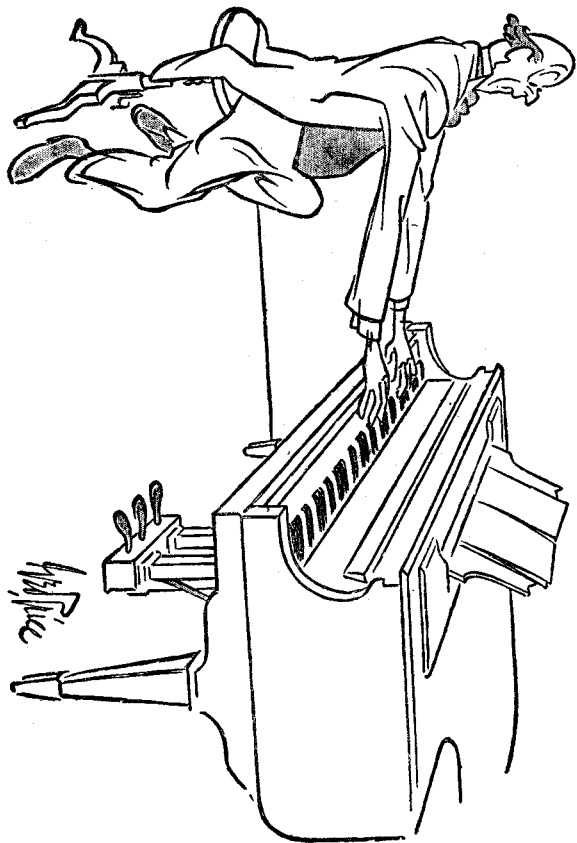
練習するといふ事は、初見練習であれ、テクニクであれ、又は楽曲であれ、明るい気持でやる時は楽しみである。沈んだ気持でやる時は、楽しみというよりもつと深いものになる。と言うのは、それが心を占領して心配事を圧える働きをするからである。それは、仕遂げた事に対する喜びを与え、屢々不愉快さを全く消して終う。私が練習を沈んだ心持で始め、終つた時には明るい気持になつていたことは数え切れない程ある。カレーニョ女史は「音楽でも他の仕事でも、熱心にやれば其処には天使の翼になでられるような慰めがあります。この事は音楽を愛して練習す

る人には言う必要が無いでしょう。それは喜びの中のあらゆるよいものの中で、音楽が一番人の心を慰めるからです。」

さて、これからピアノの前に坐つて長い楽しい仕事を始めるに先立つて、我々は次の事を明らかにして置かねばならない。マルク・ハンブルクの著した“*How to play the Piano*”の中には熱心なアマチュアの役に立つ事柄が沢山入つているので、これ迄もその本から色々引用したところから先もそうしようと思うが、その本の「鍵盤に対する位置」という章で彼は「鍵盤に対しては中くらいの距離の所に席を占めねばならぬ。つまり、近過ぎてはいけず、遠過ぎてはいけない」と言っているけれど、私にはこの言い方は不十分であると思われる。或る晩私は其の部分を友人のジョージ・プライスに読んで聞かせたら、彼も賛成して「その部分は説明しなくてはならない」といつた。次の頁に彼の説明をのせる。



Too Near



Too Far

三、楽 曲

趣味の人は即ち蒐集家と呼ばれる持て余し者である。世の中には奇妙な蒐集家があつて、切手や、宝石や、絵画や、骨董品や、時計や、マッチのペーパーや、古い木版画や、変な形をした壺や、名士のサインや、銀行通帳の書入れや、金とギャンマンのシャンデリヤを集めている。この集積本は人間でも栗鼠でも同じ位強いが、栗鼠と違つて人間は木の実る時だけ、その本能を發揮するわけではない。

趣味のピアニスト達も決して除外例ではない。実際に——ここで俗物的な言い方をするが——彼等こそは総ての中で最も寿命の長い品物を集める蒐集家である。よい音楽は、それが書かれた楽譜よりも長く生き延びるのみならず、ラファエロの油絵よりも、ミケランジェロの壁画よりもブラクシテレスの彫刻よりも、エップスタインの彫刻よりも長く生きるであろう。よい音楽は不滅である。アマチュアピアニスト達は、集めるといふ事に対する単純素朴な愛情から集めている

という点で、専門家のピアニストよりも幸福である。そうして彼等は自分達の蒐集物を楽しむ毎に、自分自身がそれを演奏するという大きな利点を持つているから、その点で他の種類の蒐集家よりも幸福である。彼等は——彼等自身で——色々の貴い蒐集物を弾き生かさねばならない。

我々は、我々の友達を一人々々違つた面に於て愛し且つ尊敬する。それは一人の友達は何のどの一人とも違うからである。我々が蒐集する楽曲はすべて我々の友達である——それを習おうと考えている時にも、習いつつある時にも、習い終えた後でも。一つの曲が他のどの曲とも異つてゐる事は、一人の人間が他のどの人とも異つてゐると同じである。人間の友達のようにそれ等は我々の心を温める。人間の友達のように我々はそれ等と親しめば親しむ程それ等を愛する様になる。人間の友達のように、知れば知るほど我々はその値打を認めそれを尊ぶ事を知るのである。

A 楽曲を選ぶには

次に記す二十五の作品は、嘗てバックハウスが音楽の「絶妙な花」と呼んだものである。これ等はテクニクの上から言うと「平易」から「中等」に亘り五つのグループに入れられる。各々

のグループは、前のグループより幾らか程度が進んでいる。それ等は好みに従つてどういう風に組合わせて練習してもよい——二曲ずつでも、三曲ずつでも、十曲ずつでも、或は二十五曲を一つに纏めてでも。勿論、弾く人の従前弾いた作品とか、その人のピアノ曲に於ける一般的知識とかに応じて、幾多の置き換えをする事は構わない。兎に角、自分が弾こうとする曲は、自分が弾きたいと思うものを選びねばならない。此処で私は、アマチュアピアニストの考えるべき材料を並べるとしよう。

バックハ……………平均律ピアノ曲からハ長調前奏曲第一番

ペートーヴェン……………ト長調メヌエット

ショパン……………イ長調前奏曲作品二十八第七

グリーグ……………ハ長調夜想曲作品五十四第四

マクダウエル……………「野バラに」

バックハ……………二部のインヴェンション第一番

ショパン……………イ短調マズルカ作品六十八第二

ショパン……………ホ短調前奏曲第三

ナバルロ……………スペイン舞曲

シリル・スコット……………レント

バッハ……………二部のインヴェンション第十三番

ベートーヴェン……………「エリーゼの為に」

ゴドウスキー……………Alt Wien

グラナドス……………Pleyera

メンデルスゾーン……………無言歌第九番「なぐさめ」

ショパン……………変イ長調練習曲（遺作）

ショパン……………ロ短調前奏曲作品二十八第六

ショパン……………変ニ長調前奏曲作品二十八第十五

メンデルスゾーン……………無言歌第四番

シューマン……………Warun ?

ショパン……………ホ短調夜想曲作品七十二第一

ドビュッシー……………「亜麻色の髪の乙女」

リスト……………「コンソレーション」第三番

バルムグレン……………「五月の歌」

シューマン……………「予言の鳥」

私は私自身が一九三八年の七月迄に譜譜し終つた「グループ一」の二十五曲の此処に記して曲目を選ぶ御参考にしよう。これ等は、私が前よりも易々と今なお練習を続けているものである。このグループの中には、右に記したのも、それ以外のものもある。

1 アルベニス……………マラゲーニャ

2 バッハ……………ト短調ガヴァットとミュゼット

- 3 バッハ……………ロ短調バルティータの中ジグ
- 4 バッハ……………二部のインヴェンション第八番
- 5 プラームス……………ハ長調間奏曲作品百十九第三
- 6 プラームス……………ト短調夜想曲
- 7 ショパン……………ハ短調練習曲作品二十五
- 8 ショパン……………イ短調マズルカ作品六十八第二
- 9 ショパン……………ホ短調円舞曲
- 10 ドビュッシー……………「月の光」
- 11 ドビュッシー……………「亜麻色の髪の乙女」
- 12 ドビュッシー……………「ミンストレル」
- 13 グリーグ……………ハ長調夜想曲作品五十四第四
- 14 イベール……………「小さい白いロバ」
- 15 リスト……………「コンソレーション」第三
- 16 メンデルスゾーン……………ホ短調スケルツォ

- 17 ナバルロ……………「スペイン舞曲」
- 18 パルムグレン……………「五月の夜」
- 19 プーランク……………Mouvement Perpétuel
- 20 シューマン……………「アラベスク」
- 21 シューマン……………Des Arbends
- 22 シューマン……………「予言の鳥」
- 23 シューマン……………Warun ?
- 24 シリル・スコット……………Lotus Land
- 25 シリル・スコット……………Valse Caprice

ここ迄読んだ方には、こういう方法で練習をすれば——即ち、私の説教通りにやれば、私は右に記したどの曲でも六回の繰り返しに依つて完全に「取り戻す」という事実に興味を持たれる事と思う。更にこの二十五曲のグループ全体を八日間で、それを三回綿密に手入れをして、二十四日間で、即ち一ト月に余程足りない期間で復習する事が出来る。この事は少し敘述が個人的に傾

き過ぎるかも知れないが、私が現に語譜しつつある「第二のグループ」を挙げよう。私はこの「第二のグループ」を長い間骨を折つて練習した。いつになつて之を語譜し終えるかは未だ判らない。

- 26 バツハ||ブゾーニ……………象讚前奏曲「イエスよ、われ汝を呼ぶ」
- 27 バツハ||ブゾーニ……………ハ短調幻想曲
- 28 バツハ||ヘス……………象讚前奏曲「主よ、人の望みの喜びよ」
- 29 ベートーヴェン……………ハ短調変奏曲
- 30 プラームス……………変ロ短調インテルメッツ
- 31 プラームス……………ホ短調インテルメッツ
- 32 ショパン……………子守唄
- 33 ショパン……………エコセーズ
- 34 ショパン……………イ短調マズルカ作品四十一第二
- 35 ショパン……………嬰ハ長調夜想曲
- 36 ショパン……………前奏曲作品四十五

- 37 ショパン……………ロ短調スケルツォ
 - 38 ショパン……………変ロ短調スケルツォ
 - 39 ショパン……………嬰ハ短調ワルツ
 - 40 ショパン||リスト……………ポーランドの唄 *Moja piesszotka*
- この字は「私の喜び」という意味でショパンの書に歌曲をリストが編曲したものであ。誠に美しい作品で、これを練習する事は私の最大の *Piesszotka* の一つである。
- 41 ドビュッシー……………沈める寺(前奏曲集第一巻)
 - 42 ドビュッシー……………デルフィの舞姫(前奏曲集第一巻)
 - 43 ドビュッシー……………前奏曲(組曲 *Pour le piano* より)
 - 44 ドビュッシー……………映像第一集 水の反映
 - 45 グリフス……………白孔雀
 - 46 ヘンデル……………調子のよい鍛冶屋
 - 47 モーツァルト……………ヘ長調奏鳴曲 ケッヘル三〇〇K
 - 48 ラフマニノフ……………ト長調前奏曲
 - 49 シューベルト||リスト……………Valse Caprice No. 6

最近私は偶然の機会からマテオ・アルベニス（一七六〇—一八三二）の作になるスペインの古風な愛すべき奏鳴曲を覚えた。さて私はその曲の代りに、この第二のグループのどれを省くべきかという問題に当面している。こういう問題が趣味人の真髓なのだ。

私は、目標として百二十五曲——二十五曲から成るグループを五つ——を定めた。この目標に到達するとしても、いつ到達するかは疑問である。結果はどうであろうとも、私がこの楽しい趣味の仕事の十何年分かを計画したという事を考えるだけでも誠に喜ばしい。

B 最も弱い部分を最も強い部分に変える

医師の言うところでは、足や手の骨の折れたところが若しも正しく接がれたならば、その折れた場所は却つて最も強い場所になるそうである。

この事とこれから述べようとする事との間に私は共通点があるように考えたいと思う。これか

ら述べようとする事と言うのは、我々の仕事にとつては基礎的な事なのである。

ピアノを習う上で、難かしい部分を特によく勉強する事の値打が認められていることは、別に珍らしいとは言えない。それは最も古く且つ最も健全な考え方の一つである。しかしピアノの練習について、この面へ進むための私のやり方は些か珍らしいかも知れない。それは其の部分特に重要視し重点を置き幾度も繰り返してやるといふ風にするのではなく、私はそれに向つて熱狂的に狂乱的に立向おうと言うのである。

私は今読者に向つて、真正面から目を据え、ゆつくりとやや大声で次の様に語る。

「練習する曲一つ一つについて、特に難かしいと思う処に記しをつけ、それ等の部分を根気よく、熱中して、知的に、そうして仮借なく——それを打ひしぎ、叩きつけ、組み伏せ、圧倒し、征服するまで——それを完全かつ永久に最弱の部分から最強の部分に変わるまで練習する事を主張するのである。」

これが私の秘訣である。私の主張である。ここに私は、読者が不可能と思つていた高さに乗る読者の演奏技術を作り上げる事の基礎的条項を述べた。一般のピアノ教師達は、この平凡な常識的なやり方に対しても、生徒に一曲をしまい迄学ばせる事や諧謔させる事に努力を払わないと同

様、無関心でいる。しかしこのやり方は数え切れない程多くの長所を持つている。

第一に、最も弱い部分を最も強い部分に変えれば、曲全体の難かしさは非常に減つてしまう。それは「協奏曲程度」の曲を「ソナチネ程度」の曲に、「難曲」を「中曲」に———という名を付けてもよいが———引き下げる。

第二に、この特殊なやり方をする目的で選ばれた部分は、全曲を誦譜する最後の段階に必要な色々な技巧の要素なのである。

第三に、こうしてマスターされた各部分はテクニクの練習に適当な材料となる。それは皆難かしい部分と認められたものだからであり、その部分を含む全曲をマスターする為に征服すべきものだからであり、それと同時に、その部分が難かしい原因となつているテクニク上の問題をマスターしなければならぬからである。このシステムに依つて曲目の数を段々に殖やして行けば、テクニクの方も段々に上達する。

第四に、曲を一度も誦譜した事のない人にとつてこのやり方は、将来極めて面白いと感じる様な方法への理想的な手引となるだろう。難かしい部分は練習の始めから誦譜するのでなければマスター出来ない。しかし部分というものは全曲ほど長くはない。部分は何頁という長さでなく、

何小節という長さなのだ。

一つの部分を征服する為に要する精神的努力は、全曲を征服する為に要する精神的努力よりは、ずつと少いであろう。若しも難かしいと思われる部分が何小節というのでなく、何頁という程続いているようであつたらば、その曲は全体としてその演奏者の手に負えないものなのだから、暫らくその儘にしておいて後に又取り上げるのがよい。

第五に、之は言う必要もない事だが、こうして征服した一つ一つの部分は、弾く人に、事を成し遂げたという気持を与える。それと、自分自身の綿密な計画と能率的な努力とに依つて困難の山を崩してしまつたという自覚に助けられた安心感をも得るであろう。

第六、最後に、この方法を忠実に実行する事に依つて、次にやるべき仕事———全曲を誦譜する仕事———は、何か底抜けに嬉しい様な喜びを与える程嬉しいものになる。

前に述べた様に、それから先の仕事を易しくやれる様にするには、この段階の仕事を骨を折つてやらねばならぬという事が判るであろう。しかし注意したい事は、難かしい部分を征服する事は困難であるとは言え越え難い程困難なのではない。テクニクの上から言うとかかなり働かなくては出来ない事だけれど、其処には長さが短いという特典がある。

この事を私の頭に吹き込んだ人は、ボルディ・ミルドナー女史である。この若いオーストリア生れのピアノリストが、一九三二年ニューヨークのタウン・ホールでの初舞台でセンセーションを起してから間もなく、私は彼女がどうして練習したかを尋ねた。特に私は彼女がどういう風にしてあの素晴らしく難かしいバラキレフ作曲のイスラマイを練習したかを尋ねた。彼女はその曲をベートーヴェンのバガテルでも弾く様にやすやすと片附けたからである。彼女の答は短かつたが啓示に富んでいた。「私は難かしい部分を始めに稽古するのです。」私達アマチュアはバラキレフのあの恐るべき曲全体が難かしい部分だと思ふ。しかしそれだからと言つて、私達が今日標としている様なそう大して難かしくない曲について、ミルドナー女史の賢い勧告を応用する事に躊躇しないがよい。実際、次に記す様に練習して行けば、ミルドナー女史自身がやつたよりも（これも彼女から聞いた事であるが）もつと忠実に、彼女の勧告に従つた事になる。その方法として、私は左記の段階を提案する。

先ず、ピアノの譜面台に、これから習おうとする、又は習い直そうとする曲の楽譜をのせる。その譜を見ながら全曲を終りまで弾き、非常に難かしい部分が出て来ても何とかして切抜ける様に努める。これに依つて、全体に対する貴重な印象が得られ特別に困難な部分がどの辺にあるか

という事が分るのである。指が止つたり、ためらつたりする場所は、それぞれ大なり小なりの難所——複合的な或は単純な難かしい部分——である。

その後でもう一度全曲を弾き、難かしい部分ごとに鉛筆で記しをつけるがよい。

記しをつけるのには特別なやり方がある。これを特に注意して頂き度い。その部分には、難所の数音符前と数音符後までを含ませるのである。これらの前後に付く音符は、難所の部分を他と結びつける役目をするのである。

そこへつける記しは、○でも、チェック・マークでも、ボタンでも、指印でもよい。私自身は、「記しを部分の始まるところの高音部譜表の上につけ、」の記しを部分の終るところの低音部譜表の下につける。こういう記しは、容易く見られる様にハッキリつけなければならないが、楽に消せる様に軽くつけるのがよい。それは、嘗ては難所であつた所が今では曲の中の一歩よく弾ける点であるという事を自分自身が正直に認めるその偉大なる瞬間が来た時の用意の為である。

さて、難所に記しをつけたらば、これの征服に取りかかるべきである。その部分を、前後の数音符と共にゆつくり数回弾いて見る。——その時は、すべての音符を正確に読み、特に臨時記号を落さない様にし、ゆつくり弾けばゆつくり弾くなりに、各音符の相互の長さを正しく、強弱の